

# 狭山丘陵村山下貯水池沿岸におけるカンアオイの分布と生育環境

荒木志子

カンアオイは、常緑性の多年性草本で山地や丘陵地の林床に生育しており、少産性で長距離分散の能力を持たない上繁殖期に達する時間が長い。よって、分布圏は主に生育する地域の地史に規定されると考えられている。そのため、従来、地史に関連づけた研究が多かった。しかし、それを裏付けるためにはカンアオイ分布地における過去の環境条件の推定、と同時にカンアオイの生態や生活史、植物としての好適環境の解明に関する研究が必要だと思われる。そこで本研究では狭山丘陵村山下貯水池沿岸において、カントウカンアオイ・タマノカンアオイの分布と生育環境について考察することとした。

まず、調査地域全域を踏査し1/2500地形図上に分布を画的におさえた。次に、カンアオイが比較的大きい葉をつけ密に分布している19地点ほかなどの計22地点に大きさ1m×1mのコドラートを設けた。そして、気温・地表面温度・地温・土壌含水率・林内相対照度について、6月27日～10月4日の間に8回にわたり観測・測定を行った。また、カンアオイの個体数・葉数・花数などを調べた。その結果、調査地域内では以下の傾向が認められた。

カンアオイの分布については、①地域の東部には見られないこと、②北向き斜面に広く分布しているのに対し、③南向き斜面では分布がわずかで

あること、④カントウカンアオイとタマノカンアオイは混生していないこと、⑤両種とも谷筋に集中して分布し、⑥平らな尾根上には殆ど生育していないこと、⑦谷底面では分布を欠く部分の面積が広いこと、などがわかった。

カンアオイの生育状況については、①ヒサカキやアズマネザサの密度が高いと林縁に集中し低いと林内にも点在すること、②8月中旬頃から当年葉の一部が黄色化し葉を脱落させるが後に花芽や花が着生する（カントウ）こともあること、などがわかった。

カンアオイと生育環境の関係については、①北向き斜面におけるカントウアオイ生育地の7月末～8月末の間の地温が南向き斜面と比較して抑えられていること、②気温・地表面温度が他より高いにもかかわらず地温はさほど高くないコドラートがあること、③S向き斜面で土壌含水率が低いにもかかわらず地温が低いコドラートがあること、などがわかった。これらから、④夏の高い地温はカンアオイに好ましくない条件と考えられた。すると、⑤谷筋に分布が集中していることは土壌水分が豊富なことにより地温の上昇が抑えられるためであろう。

本研究は、夏場のみ調査であったが、今後は年間を通じた観測、特に今回測定出来なかった日射関係の観測を含め行うべきであろう。

## 諏訪湖御神渡りと気象の関係に就いて

—20世紀前半を中心として—

石黒直子

諏訪湖の結氷・御神渡りの500年に渡るその記録は貴重な気候復元資料として古くから重要視されてきた。本論文ではこのような気候復元を行う前段階として、この結氷・御神渡りという現象がある特定の気象状況を示す指標となるのかを気象データとの関係を見ることによって明らかにすることを目的とした。今までにも諏訪湖の結氷・御

神渡りと気象データとの関係を見た研究はあるが、本論文においては、それらの研究では使用されていない20世紀前半の気象データを用いて解析を試みた。

これによると、結氷するときの気象状況は、その前日に風力が強くなり、当日には風は弱まり雲量が少なくなっているという統計結果が得られた。

これは、結氷日の前日に、西高東低の気圧配置になる前の低気圧が通過するために風が強くなり、当日は高気圧に覆われ、雲の少ない放射冷却の大きな日に結氷するということを表している。

また、最近（20世紀後半）の方が、昔（20世紀前半）よりも更に気温が低下しないと結氷・御神渡りがおこらないという傾向が見られた。これは、結氷については、諏訪測候所によって、明確な結氷日の定義が決められ、その基準が厳しくなったことが挙げられる。また、最近の湖の変化（湖盆の形態の変化・温泉の湧出量の増加・湖岸の変化など）によって、氷がはりにくくなってきたことも考えられる。この、湖岸の形態の変化というのは、昔はアシがあった岸辺が、今ではコンクリートで固められてしまったということであり、これ

によって波の抑制や氷の固定作用がなくなってしまった。そしてこれは御神渡りにも影響を与えており、岸に氷が固定できなくなってしまったことにより、氷の力が岸の外に逃げてしまい、氷の膨張時には氷は岸にせり上がって御神渡りとしては現われにくくなってしまった。これが、御神渡りの形成時の最近の気温低下を引き起こしている原因と思われる。

また、諏訪湖の結氷・御神渡りの記録は藤原・荒川によって1つの連続的なデータとしてまとめられたが、このうち1892～1923年の御神渡り日は拝観日の間違いであることが分かった。1924～1944年の御神渡り日と気象データとの関係から、1898～1923年の御神渡り日の推定を行った。

## 現代作家の描いた世界： 村上春樹と彼の作品を事例として

伊藤直美

村上春樹の一連の8作品を分析し、そこで描かれる「場所」について検討した。個々の「場所」を検討した結果、「場所」を含む「世界」について次の結論を得た。

初期二作品とそれ以降の作品とでは明らかにその作品世界のスケール及び対比される世界が異なるように感じられる。

しかし、初期二作品では、主人公は自分が育った場所を、すでに過ぎ去った過去の場所だと認識

している。そして、『ノルウェイの森』や『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』において、その時間の経過の認識こそが、村上春樹の作品の中では死に結びついている。

例えば、「死んでしまった人は生き残った人の記憶の中にしか生きない。しかしその記憶は時間の中でどんどん抹殺されていく。」のである。

村上春樹はこの8作品でさまざまな角度から生と死を描き続けていると考えられる。

## 江戸時代末期の横須賀における天候の変動と農作業

越智由美江

測器による観測データが得られない歴史時代の気候の復元には、各種の日記や災害誌の記録が用いられる。現在、歴史時代の気候を復元する研究は、複数地点の記録をもとに天候の空間的分布を把握し天候の推移や季節変化を論じるものが主となっており、天候の推移と人間の活動との関わりについて論じられているものは見当たらない。

そこで本研究では、現在の神奈川県横須賀市太

田和の記録である『相州三浦郡大田和村 浅業家文書 浜浅業日記』を利用し、天候の推移と農作業との関わりを考察する。まず、日々の天候を抜き出し天候ダイアグラムを作成した。この天候ダイアグラムから降水日数・降雪率の算出、“梅雨”期間の推定を行ない、天候の変化をみた。降水日数は現代の横浜の値とほぼ同じであったが、降雪時期は当時の方が長いという傾向があった。